関西自然保護機構会報 19(1)：39－43，1997

淀川自然教室から見た自然教育

子供と自然観察研究会　有　馬　忠　雄

EDUCATIVE ACTIVITIES FOR NATURE CONSERVATION BY THE YODOGAWA (YODORIVER) FIELD LABORATORY

Tadao ARIMA

淀川河川公園・野草広場地区を舞台に18年間続けてきた「淀川自然教室」における，われわれの実践を報告したい。まずは，「淀川自然教室」というものについて触れておこう。

淀川自然教室について

淀川河川公園の整備・充実に伴って，昭和50年頃，公園の利用を考えるために淀川工事事務所・河川管理財団の関係者と，瀬戸剛氏・矢野悟道氏など数名の学識経験者および観察会指導者を交えた検討会がもたれた。検討会席上，公園を自然教育の場として活用する案が提出され，これの運営を有馬が担当することになった。

これを受けて，有馬は，当時一緒に淀川河川敷生態調査や各種観察会の指導に携わっていた仲間たちと共に，河川公園のうち主として「野草地区」において「淀川自然教室」を開催することを計画した。計画案は前記の検討会に提案して検討が加えられ，実施に移された。計画案の一部，淀川自然教室運営案の概要は下記のとおりである。

1）開催地，日時など検討会の席上で決定する。
2）開催に先だって，主要新聞紙上に広告して参加者を募る。
3）参加者は，小学３年生以上，保護者の同伴が必要。
4）指導陣は一ケ月前に現地を下調査し，テキスト（Ｂ６）を作成する。
5）開催前日，リーダー会議を持ち，自然教室の内容の確認と参加者（子供）のグループ分けを行う（内容に従って，縦割り・横割りなど）。１グループの人数は10名程度とする。
6）当日は，子供組・大人組に分かれて行動する。
7）各グループによる報告会を行い，終了する。

なお，参加者には観察用具として，三枚繰り出しルーペ・折れ尺・肥後の守・セロテープなどを貸し出している。このほか，現場に即して，スコップ・鎌・鋸・石膏などを予め用意することもある。また，参加証として特製バッジを出していたが，最近はティーシャツに替わった。その他，後になって，参加しやすいようにという理由で名称を「淀川の自然を楽しむ会」に変えた，など長年の間の変容があった。

観察地としての野草地区

自然教室の舞台である河川公園・野草広場地区についても触れておく。

国営淀川河川公園は施設広場地区，野草広場地区，自然地区，景観保全地区の４種類に分けられる。「淀川自然教室」が催されるのは，これらのうち野草広場地区を対象にしたので，野草広場地

区の概略を紹介しておきたい。

野草広場地区は現在９カ所ある。

大淀野草地区

十三大橋の下手左岸，河口から5.8～6.6km 地点にある（以下，「河口から」を省略する）。ここを利用するときは，阪急中津駅に集合して，約１km 移動するのが通例である。オギ・セイタカアワダチソウが優占する草地と移植によるヨシ草地および人工池がある。

公園造成前，高水敷の湿地にデンジソウが生育していたが，これを取り込んで造られた人工池の干上とともに姿を消した。僅かに水域の残った人工池では子供達がトンボのヤゴやアメリカザリガニ，ウシガエルの幼生などを追っかけて遊んでいたものだが，現在「水辺で遊ばないようにしましょう」の立て札が立てられている。この池も干上が近い。

公園の外，２m近い崖を下りると水辺である。フナムシ・ヨコエビ・ヨシガニ・フジツボ・カワサンショウガイなどが生育している。

十三野草地区

地下鉄御堂筋線鉄橋の下手右岸，７～８km 地点。最下流部に「摘み草苑」が造成されており，何種類もの草花が栽培されている。ただし，管理されていないので，野草の繁茂著しい。ヨシ・オギ・セイタカアワダチソウが優占する草地がある。浅い人工池の周りはヨシ群落で占められるが，干上間近い。

公園の外，約２mの崖を下りれば，水辺に出られる。砂地もあって，シジミ・フジツボ・ヨシガニ・カワサンショウガイなどが生育している。首まで水に浸かってシジミを採るプロの姿も見られる。また，最下流の水辺には，ウナギ採取業者の基地もあって，見る人の興趣を誘っている。感潮域にあるため，水際線の変動が子供を引きつけるほか，干潮時には広い中州が現れ，冬場には餌をついばむ水鳥の姿に子供の興味は尽きない。

「淀川自然教室」としては人気のある場所で，毎年１回は利用しているが，地下鉄御堂筋線西中島南方駅または阪急南方駅に集合し，約800 m移動する必要がある。

八雲野草地区

鳥飼大橋の下流，約１km の左岸，14.8～16.0 km 地点。かつては人工池も見られたが，造成後早くに干上がってしまいチガヤ・メリケンカルカヤ・セイタカアワダチソウからなる草地に被われる。

一津屋野草地区

鳥飼大橋の右岸直ぐ下流。16.6～17.1km 地点に当たるが，未完である。

鳥飼野草地区

鳥飼大橋の上流，右岸，17.5～18.8km 。供用開始当時，千鳥掛けの湿地が造成され，ヤゴがしがみついた湿地植物などが見られ，子供達が楽しんでいたが，何時の頃からかこれが見られなくなり現在はオギ・セイタカアワダチソウが僅かに残る草地の他には芝生だけになっている。

仁和寺野草地区および占野野草地区

有料の鳥飼仁和寺大橋と淀川新橋とに挟まれた左岸に，占野野草地区と隣り合っている。19.8～21.2km に亘る。人工池も造られていたが，ほとんど枯れてメリケンカルカヤやセイタカアワダチソウに被われている。

出口野草地区

京阪電鉄光善寺駅の西約1.2 km の左岸，22.7

～23.0km 地点にある。セイタカヨシ・セイタカアワダチソウを主とする草地と芝生。公園内で，園芸植物の栽培試験を行っていたがその結果は不明のままである。

伊加賀野草地区

出口野草地区から約 1 km 上流左岸，23.5 ～24.5km 地点。干上がった人工池にヨシとセイタカアワダチソウが生育するほか，芝生とセイタカヨシ・オギの草地がある。公園に隣り合ってクズの広い繁殖地がある。晩秋にはこのクズから葛粉を採取するのに都合がよい。公園の外は直ぐ水辺になっている。

光善寺駅に集合して，約 1.2 km を移動せねばならないが，割に使いやすいため，既に多数回利用した。

以上 9 カ所の他に景観保全地区としての背割堤地区（三川合流点）がある。ここは，木津川と宇治川の導流堤ともいわれ，両川の間に設けられている堤である。かつては，堤上にクロマツの並木が見られ，映画の撮影にも利用されていたが，現在はソメイヨシノの並木に替わった。堤の斜面に生育する草本のほかには，セイタカヨシやセイタカアワダチソウの草地が見られる。

自然教室にとって野草地区は，広い芝地があることで，思いがけない観察を可能にしたとはいうものの，淀川にありながら淀川を感じ得ない点で観察地としては必ずしも理想的とは言えないが，上水道，移動便所の設置があるなど，他の観察地に見られない利点もあった。したがって自然教室も，集合場所として利用するにとどめ，主な野外観察は公園外の河畔を利用することが多かった。

自然教室と参加者たち

第一回のテキストを見ると，草や虫の絵がいっぱい描かれており，「野草地区で出会うことのできる生き物たち」が主なテーマになっていたことが分かる。

ところで，有馬は堺市立科学教育研究所勤務中，以下のような苦い経験をした。

科学教育研究所の住民サービスとして，「親子科学教室」が年に何回か開催されていた。ある「親子科学教室」でのことである。昼食時に子どもが草の名前を聞きに来た。その草とは，私が子ども達と一緒にカタツムリを追っかけたり，アリの行列を追跡したりしていた間に，同伴の親が採集したものであった。子供は私に聞いた草の名前を親に伝えに行くのだが，一度で名前を覚えられず，親と私の間を何度も往復するはめになった。ついには鈍くさいわが子に腹を立てた親に叱られ，泣き出してしまった。夏休みの宿題にでも，と考えた親心はよく分かるが，この子どもにとっては「親子科学教室」は苦難の教室となってしまい，やがては自然嫌いになってしまうのではないか，との危具を覚えたものであった。

このような経験から，自然観察のあり方について疑問を持っていた有馬にとって，「淀川自然教室」は実験室としての性格を持っていたといえる。

前回（1996. 10.. 20 三川合流点，背割り堤地区）で第51回を終えた。かつて「淀川自然教室」の参加者だった若者が，リーダーとして帰ってきてくれていることが，なによりの教室の成果を物語ると考えているが，現場や，毎回の終了前の報告会で見せてくれた参加者の実態を，読みやすく書き直して，実践記録に代えたい。これらを通して，「淀川自然教室」が自然教育に対して抱いている夢をご賢察願えれば幸いである。

砂の下に川が流れている

真夏の砂州で，水を得るために砂地を掘った。直ぐに水の出てきた穴や，肩口まで掘って，やっと水が出た穴などあった。穴の中に見える水面の高さを比べてみようということになった。子ども達の考え方は，穴と穴を溝でつないだとき，水面の高い方から低い方へ水が流れるはず，というものであった。ところが，実際に溝でつないでみると，水はいつまでも流れ続けたのである。大人も子どももこの現象に混乱したが，「砂の下に川が流れているのだ」という子どもの発言がすべてを説明したのである。

服を汚して帰っても，これからは叱りません

十三野草地区で，大人グループはシジミ採りに夢中だった。子ども達は，泥の中でのシジミの居方を調べたり殻を破って心臓の動きを見たり，うんと小さいのから大きいのまで並べてみたりして，シジミと遊んでいた。泥んこになったかあさんの一人が言った。「あー楽しかった。これからは子どもがどんなに服を汚してきても叱りません」と。

葛粉採り

クズが繁茂している伊加賀野草地区での葛粉採り。大人も子どもも力を合わせてクズの根を掘り出す作業。蔓を探って，掘る場所を探す。蔓は所々に根をおろしていて，どこに本当の根が隠れているのか分かりにくかった。長い蔓は途中で根を出すのだ。河川敷は土が軟らかいので掘りやすいが，根が意外に深いところまで伸びているので作業は大変だった。

クズの根を掘りながら，ミミズが飛び出したり，ムカデと遭遇したり。根を囲んでいろいろな虫たちが生活しているのを見つけたり。大人も子どもも根っこ掘りに夢中になってしまった。

掘り出した根から葛粉を取り出すのが，また大変。焦げ茶色の汚い水の中を，白い粉が沈んで行く。根っこの中にこんな粉があったなんて，ものすごい不思議。みんなで飲んだ葛湯は，泥の匂いがして，なんとも不思議な味だった。

長いクズの蔓を地面に伸ばしてみた。枝分かれがあって，木と同じ姿が見えた。この蔓で縄跳びをした。十人くらい入って跳ぶことができた。

虹が出た

背割堤地区の宇治川。大きな渦が巻いていた。小さな魚がいっぱい泳いでる。石を放り込んだら深さが分かるよ。ア，虹が出た。

雲が壊れて落ちている

黒い雲が崩れて落ちている。あれは，雨だよ。雨って遠くから見るとあんなふうになってんのか。ほんとだ，雨が降ってきた。あ，虹も出てるよ。

キノコ植え

シイタケをこの木に植えるんだって。植えられる長さにちゃんと切ってあるね。この木を元に戻してみようか。一番太いこれがきっと一番根元だよ。次はこれだ。次は……。そうか，木を３本伐ってきたんだ。

木津川と宇治川

木津川の砂地を歩いていて，土で作った皿や壷のかけらをたくさん見つけた。土器といって，大昔の人たちが使っていた物なのだそうだ。大昔って，いつ頃なのだろう？　江戸時代かな？　それよりも昔といっても，よく分からない。こんな所に，なんで土器があるの？　川の中で住んでいたのかな？

木津川は浅くて，流れが速い。水は透明に近い。砂地が多い。宇治川は砂地がなく，緑色の水がゆっくりながれて，深い。人が作った川みたいだ。

鳥と遊んだ

伊加賀野草地区で，スズメがたくさん集まって何かを食べている。後でそこへ行ってみても，何を食べていたのかよく分からなかったけど，うんちをいっぱい見つけた。うんちの中にたねが混じっていた。そこに生えている草のたねだった。

芝生と植え込みだけの公園だったが，頭の上をキジが飛んでいった。何遍も飛んだ。キジは河原に巣を作るのかな？　山から遊びに来たのかな？

けもの道追跡

細いけもの道が草むらの中をくねくねと続いていた。どこまでも追跡した。イバラの刺でけがをしたけど，けものの姿は見られなかった。あれはきっとイタチの道だと思う。

淀川自然教室と淀川工事事務所公園課

平成８年３月　都市緑化技術開発機構による「平成７年度　河川公園環境教育推進計画調査業務報告書」が出された。報告書は，概略以下に示すような提案を盛り込んで，河川公園における環境教育に公園課がどう取り組むべきかを示している。

1）環境教育運営協議会（仮称）の設置とそこでの活動を支援すること
2）指導者の育成・環境教育センター（仮称）の整備
3）環境教育エリア（仮称）の整備

しかし実際には，新設の鳥飼センター周辺の公園構想も，環境教育センターとか環境教育エリアなどよりも，野球場やサッカー場への利用案に押されるなどその具体化にはかなりの時間が必要であろう。

「淀川自然教室」がもともと公園課の発想から生まれたものであり，初めは公園課の職員も参加していたものであったが，何時の頃からか河川環境管理財団主催のような形に変わってきたという事実に鑑み，上記の「報告書」が出たのを機に，公園課職員の自然教室参加を再び進めている。このことが，河川公園を利用しての環境教育推進の一助になれば，と考えている次第である。